

拡大する孤独・孤立問題 の現状と課題

財務総合政策研究所 ランチミーティング 2025年4月3日

早稲田大学 石田光規

1 基本的な事実

孤独・孤立が注目されるまで（3区分）

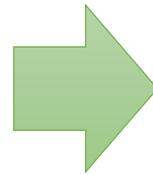
- 第1期：1970年代（高齢者の問題として）
 - 高度経済成長期の人口移動と高齢世帯の増加
- 第2期：1990年代半ば（災害のなかでの問題として）
 - 仮設住宅で取りざたされた「孤独死」
- 第3期：1990年代末から2000年代以降（世の中の問題として）
 - 顕在化する「ひとり」：未婚率の上昇、雇用の不安定化
 - 情報通信端末の普及

孤立に注目が集まる背景のまとめ

1. わざわざ「場」に出向かなくてもよくなった
2. そもそも人と結びつかなくてもよい社会になった
3. 誰かと会うためには理由付けが必要になった
4. つながりがより選別的になった



- 特定の人とつき合わなくてよい社会
- つながる相手を選べる社会
- 孤立が生まれやすい社会



- 孤立への対応が求められる社会
- 居場所や地域への注目

「問題」としての根拠

- 深刻な心身への影響
 1. 社会疫学的に証明される孤立のマイナス
 2. 運動不足、アルコール依存に匹敵する有害さ、たばこ1日15本分
 3. うつ、自殺の背景として
- 排除として立ち現れる孤立
 1. いわゆる「恵まれない」層の孤立：経済状況、婚姻、学歴、雇用
 2. 固有の層に見られがちな孤立：男性
 3. 近年に見られがちな傾向：若年層の孤独・孤立

表1 相談相手の有無（JGSS2003、人々のつながりに関する基礎調査）

	R3	R4	JGSS2003
16～19歳	7.0%	7.7%	
20～29歳	8.5%	11.4%	2.60%
30～39歳	11.5%	12.3%	2.80%
40～49歳	10.1%	12.4%	8.10%
50～59歳	10.0%	13.0%	7.10%
60～69歳	7.8%	9.8%	11.80%
70～79歳	6.0%	7.6%	18.60%
80歳以上	5.0%	7.1%	19.70%

データで見る気になる傾向

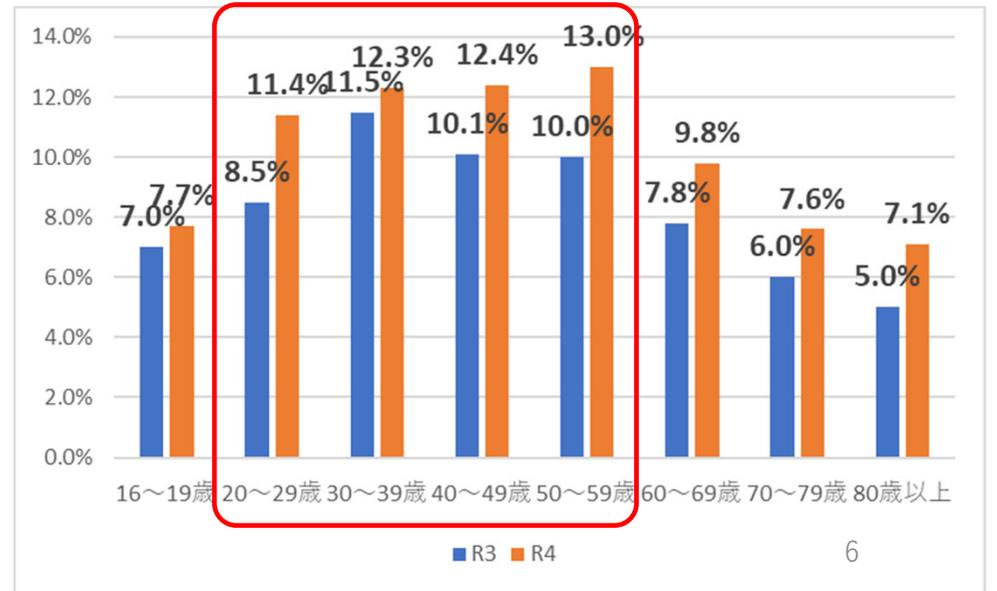
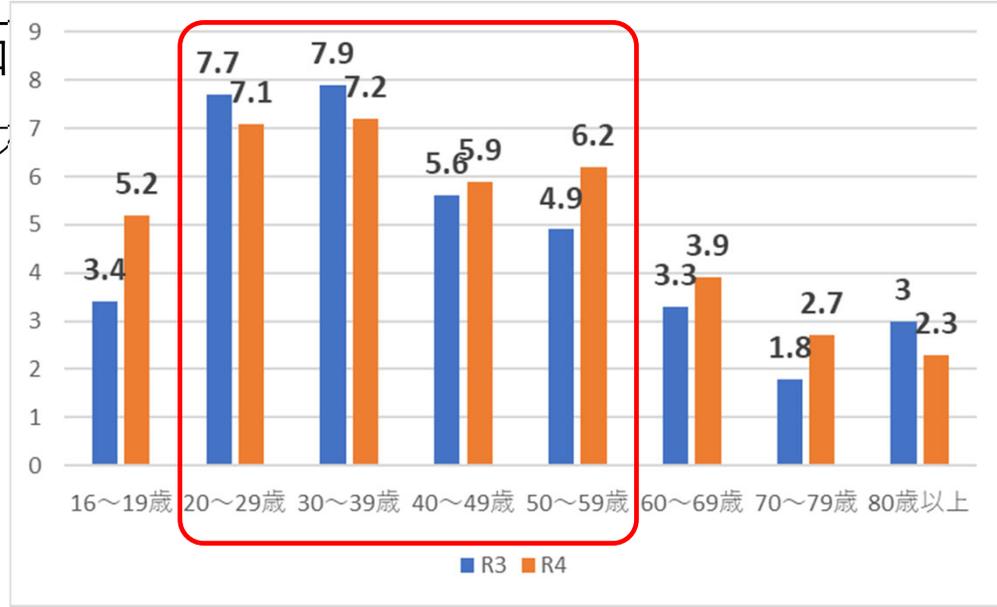
『人々のつながりに関する基礎調査』 (F)

若者の孤独・孤立傾向の確認

1. 孤独感が「しばしばある・常にある」人
 - 20代から50代までが高い
2. 相談相手のいない人（孤立）
 - 20代から50代が高い

今後の心配

1. 「かつて」と違う若者への心配
2. のしかかる未婚社会の影響



懸念される2つの問題：その1・高齢者編

- いよいよ本格化する高齢化・単身化
 - 2025年問題：団塊の世代が75歳以上を迎える超高齢社会
 - 世帯ベースでは単身世帯がほぼ4割または4割超へ
 - 孤立死の関連事例において医療・福祉関係の対応がまわらなくなる可能性

身元保証のない搬送者
への対応



- 誰が面倒を見るのか
- 医療費は誰が負担するか

亡くなった方々の事後
の対処



- 死後の処理は
どうするか
- 費用負担は誰
がするのか

懸念される2つの問題：その2・中年若年編

● ポスト家族の時代の若年・中年層

▶ 激増する「生涯未婚」(50歳時未婚)

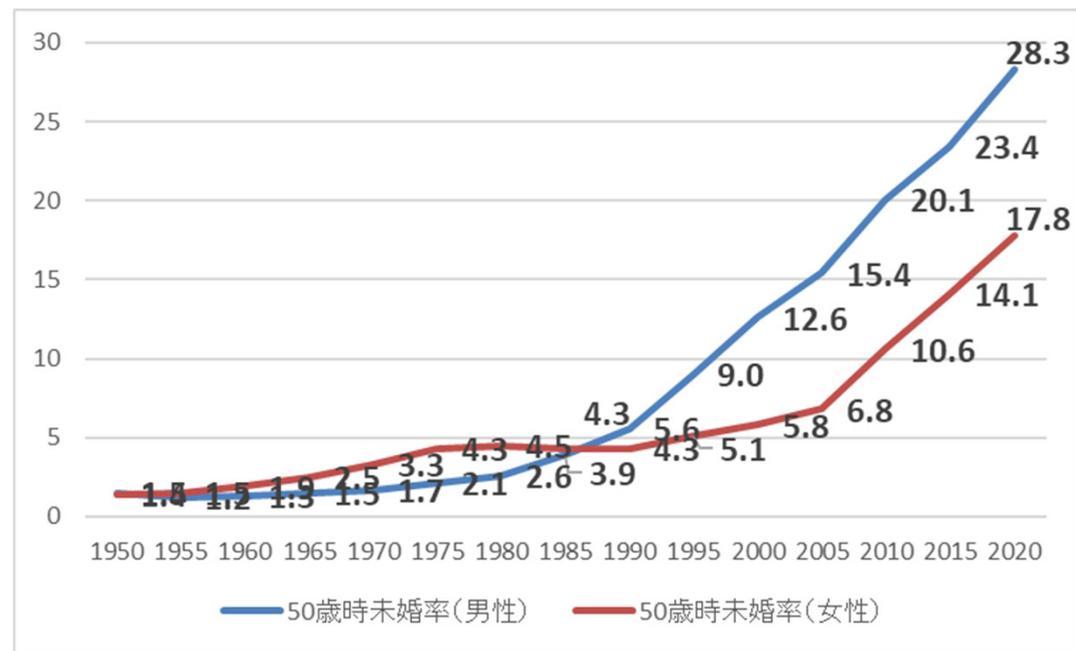
- ✓ 男性の4人に1人以上、女性の6人に1人以上は50歳でも未婚
- ✓ 親以外に一親等の「家族」をもたない人が高齡にさしかかる

▶ 他方で絶大な家族のサポート効果

- ✓ サポート研究で圧倒的にサポート力があるのは一親等(配偶者、親、子)の家族
- ✓ 日本社会で結婚しないことは、親以外の家族がないことを意味する



家族のサポートが標準・当然
ではない時代へ！



困った時に頼れる人：「家族・親族」**95.8%**、「友人・知人」**55.8%**、「自治会・町内会・近所の人」**9.7%**

内閣官房「人々のつながりに関する基礎調査」(2023)

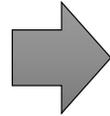
- ✓ 単身の子が高齡の親を支え
- ✓ 自らを支えてくれる関係性は不足する(孤独・孤立の加速?)

一つの悲観的シナリオ

- つながりは目減りし、ますます積極性が求められる

近い将来の予測

- ✓ ますます便利なもの、サービスが生まれる
- ✓ ますます「個人」の心理が重視される



- ✓ これまでより人とつき合う必要性が減少する
- ✓ 誰かとつき合うには、それにふさわしい魅力・理由を求められる



つながりから撤退する人が増える

さらなる孤独・孤立の拡大



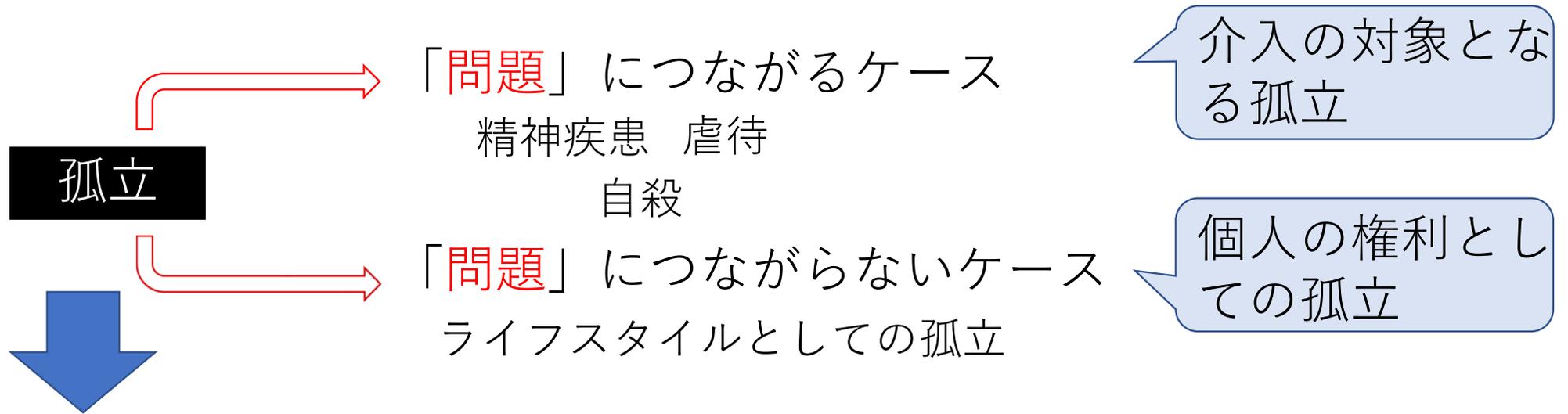
身近な場につながりを築く必要性

孤独・孤立施策の大まかなポイント

- 孤独・孤立対策の本格化（2024：孤独・孤立対策推進法施行）
 - ✓首相を長とした孤独・孤立対策推進本部の設置（内閣官房から内閣府へ）
 - ✓重点計画をもとにした施策の実施
 - ✓これまで以上の財源の確保と継続的な施策の可能性
- 推進される施策
 - ✓地方版官民連携プラットフォーム
 - ✓孤独・孤立対策地域協議会の設置（置くよう努めるものとする）
 - ✓つながりサポーター
 - ✓孤独・孤立に関する教育・啓発活動
 - ✓継続的な実態調査
 - ✓一連のつながり施策
 - ✓制度申請のオンライン化

2 孤独・孤立対策の難しさ

難しさ 1 : 対象の扱いがたさ



「問題」化することで初めて
介入対象となる！

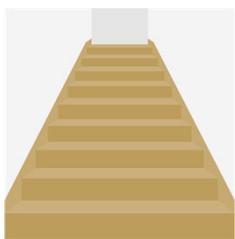
「問題」にならない場合は介入し
づらい（= 予防的対応が困難）

対象は膨大

- 虐待疑いのケースでも介入は容易ではない
- 介入するならば相当の人員と労力を要す

難しさ 2 : つながりフレイルの可能性

• 階段とエスカレーターのジレンマ



エスカレーターと階段という選択肢
➤ 健常者は階段を選んだほうがよい
➤ しかし、階段は疲れる

エスカレーターを使う

筋肉が落ちる

フレイルのリスクの拡大

• 「ひとり」と「つながり」への応用



「ひとり」と「つながり」という選択肢
➤ 一人で楽しむツールの多い現代
➤ つながるのは楽しいけど面倒

一人で楽しむ

つながりフレイルへ

人と会う筋肉が落ちる

難しさ 3 : 望まれないつながり

- 生協総合研究所の2023年調査：25歳から54歳対象

A

わずらわしくても人との付き合いが密接な社会がよい

目的や利点が無ければ、わざわざ人とつきあう必要はない

多く人は自分のことばかり考えて行動している

B

さみしくても個人の自由を尊重してくれる社会がよい

目的や利点が無くても、人とのつきあいは不可欠だ

多く人は周りの人の幸せを考えて行動している

A, ややA

34%

51.2%

78.4%

B, ややB

66%

48.8%

21.6%

ここまでのまとめ

- 私たちの社会

- 「つながること」を社会として要求される機会が減った
- 誰かとつながるには前掛かりの意識をもつことが求められる



人びとの孤独・孤立のリスクの拡大

- その一方での「難しさ」

- 個人を尊重する社会では容易に介入はできない
- 他方で社会は「つながらなくてよい仕組み」を整えていく
- 人びとの意識もつながりに対して後ろ向き



つながりをお膳立てする時代へ

3 どうお膳立てするのか

「居場所」への注目

- 政策化される居場所
 - ✓ 孤独・孤立の拡大と居場所需要の増加
 - ✓ 2000年代：居場所が「いるところ」以上の特別の意味をもつように
 - ✓ 2020年代：居場所政策の乱立
- 「居場所」と「つくる」の矛盾
 - ✓ 「居場所」の本質：
 - 個々人が**事後的**に判断するもの
 - つまり、**あらかじめ設定することが難しい**
 - 現代社会は、**無目的な居場所を目的をもってつukらないといけない**
- 居場所づくりのポイント：二つのアクセス
 - ✓ 物理的アクセス：手軽に足を運べる工夫（行こうと思ったときに空いている）
 - ✓ 心理的アクセス：「ここにいてもいい」、「私だけではない」の場づくり
- 段階的な参加
 - ✓ 参加者の希望に応じた参加の方法

「思い」のある人を支える仕組み（中間支援）

1. 漠然としたイメージから踏み出すまで：キーパーソンを逃さない
 - ▶やはり高い0から1のハードル
 - ▶多様な相談に乗ってくれる人の存在：物件、お金、仲間、地域性、告知
 - ▶必要なものにつなげてくれる人の存在
 - ▶定点観測のありがたさ
2. 同じような境遇・悩みを共有する場の必要性
 - ▶場を運営する人どうしの交流会などを開き悩み、事例を共有する
3. 見逃せない地域の特性
 - ▶既存の関わり（集落、常会）を利用しやすい農山村
 - ▶民主的手続きを好みがちに一括開発（住宅団地など）の地域
 - ▶長期定住層に頼りやすい新旧住民の混在地域（新住民を入れる工夫を）

個々人の心持ち

1. つながりの実情をきちんと理解する

- ▶ 放っておいてもつながりに取り込まれる時代は終わりを迎えつつある
- ▶ 孤独・孤立問題はこれから本格化を迎える

2. つながりの特性を頭に入れておく

- ▶ 幸せのキーアイテムとしてのつながり
- ▶ 「必要になったときに作ろう」は手遅れになりがち
- ▶ 一度離れると、遠のく循環に入りやすい

3. 特性を意識しつつも構えすぎない

- ▶ つながりをつくろうと意識しすぎず気楽に場に足を運ぶ
- ▶ 過度に期待せず皮肉っぽくもならず

オンラインおよびAIの可能性

- マイナスを0にはしうるが、0からプラスに転じるか微妙
 - ▶ 条件不利な人びとの改善に資するオンライン技術
 - ▶ 新たな場を提供する可能性
- 実際に起こりうる負の効果
 - ▶ 選別の目線が入りやすいオンライン
 - ✓ 場が失われ、人が直接つながる時代：ドラえもんの事例
 - ✓ 操作しやすい関係性：グループ、アカウント、ブロック
 - ▶ 果たして共感を得ることはできるのか
 - ✓ 共感を得るさいに重要な身体
 - ✓ 触覚の意味合い＝存在の揺らぎ
 - ▶ つながりフレイルの加速

ご静聴ありがとうございました！

ありがとうございます

